



東三本木通丸太町上りに立つ碑

鴨川の立命館草創の地

今更ながら京都はどこを歩いてても中世、近世、そして近代に刻んだ歴史が、至るところで歴然と生きている。恥ずかしながら私の知識には及ばない新発見があるたびに、まだまだ知らないことが多いと痛感する。

移宅梟川第一湾
(宅を移す梟川ふせんの第一湾)

頼山陽が愛した
「山紫水明処」近く

占来半野半城間
(占来半野半城の間)
成隣嫌接笙歌市
(隣を成し接するを嫌ふ笙歌市)
…略…
対岸欣看紫翠山
(岸に対し看る欣ぶ紫翠の山)
…略…
目送遙林倦鳥還
(目送す遙かなる林に倦鳥還るを)

天皇の代替わりと元号について 2・11 京都集会に参加して
半世紀の歴史を刻んだ原爆忌全国俳句大会
訃報に接して 戦争体験にこだわり戦争反対をつらぬいた三氏
わらじ医者と慕われた早川一光さんを偲ぶ
京都における社会労働関係資料アーカイブズを展望して
新村猛の思想形成と満州事変 ファシズムと戦争に抗う主体の誕生〈上〉

井口 和紀	3
伊藤 哲英	4
岩井 忠熊	7
木村 誠一	8
佐々木真成	9
成瀬 公策	10

例会案内／会員消息	
編集後記	
	16

幕末の儒者・頼山陽が詠んだ七言律からなる詩を、紙数の関係とはいえ「略」すなんて、あり得ないことだが、敢えてお許しを。

——鴨川の一の入り江のほとりに居を移すことになった。半ば田園、半ば町中という境目に位置している。弦歌の



鴨川の東岸から見た茅葺きの「山紫水明処」(木立を額縁に)

巷と隣接しているのが嫌だが、対岸に美しい山が眺められるのはうれしい。「略」遙かなかなたの森へ遊び飽きた鳥の群れが戻っていくのが眺められる——(生田耕作、坂井輝久『洛中洛外漢詩紀行』1994年 人文書院)

山陽は、鴨川と居宅から眺める東山の穏やかな山並の風景が気に入り、丸太町橋西詰の東三本木通丸太町上ルに終の住み処として「山紫水明処」を構えた。しかし、決して淋しい地ではなく、当時の三本木は、いわゆる茶屋や料亭など立ち並ぶ遊興の地でもあったらしい。

それでも山陽は、わが家を鴨川の西のほとりの家という意味で当初、母屋を「水西荘」と名付けた。その後、離れに茅葺きの小さな書斎兼茶室を建て「山紫水明処」とし、多くの文人、歌人、画家、若者が集うようになつた。すつかり前置きが長く

なつたが、国の史蹟として保存されている「山紫水明処」周辺を訪れたときに見つけたのが「立命館草創の地 京都法政学校設立」の碑である。1900年(明治33年)5月19日、中川小十郎(1866—1944 貴族院議員、官僚)が、この地にあつた有名料亭の清輝楼を仮校舎とし、京都法政学校(現立命館大学)を開設、夜間授業から始まった。碑に使われている和風の旧料亭の写真からも、山陽が詩に記した三本木界限の名残が見受けられる。

教員の多くは京都帝国大学(現京都大学)で、調べると入学生は305人、卒業者は57人とある。しかし、翌年12月30日には河原町通りの西、御所に近い広小路に学舎を建て、現在の衣笠に拠点を移すまでの80年間、世界と日本の激動の中を歩んだ。先の大戦では幾多の学生が戦地で若い命を絶たれた。その痛恨の反省から、戦後は「平和と民主主義」を教学理念に掲げ、今日にある。

◇ (記・出淵とき子)
「山紫水明処」は見学申し込みの必要あり

旧料亭を仮校舎に開校した京都法政学校

天皇の代替わりと元号について

2. 11京都集會に参加して



去る2月11日、京都教育文化センターで開催された「天皇代替わりと『建国記念の日』(紀元節)を考える京都集會」に参加した。

長年運動を続けてきた二つの団体の共催で、百数十の席は満席だった。

基調報告では、安倍政権の動きとともに「平和主義」者のイメージを身にもとつて国民統合をはかる現天皇の「象徴」行為への警鐘が鳴らされた。続く基調講演・山口大学名誉教授・明治大学特任教授瀬藤厚氏の「強大化する自衛隊と戦後責任」東アジアの平和の未来のために」では、最近の自衛隊・防衛省の動きは、戦前の「軍部」化に向かいかねない危険な動向だと、詳細なレジメをもとに語られ、随分勉強になつた。

討論では、自衛隊へのシビリアン・コントロールは本当にできるのかどうか、現天皇の「おことば」や行動と安倍政権の関係はどうか、等をめぐって意見が交わされた。私も発言したいと思ったが、機会を逸したのでここに少し感想も含めて書かせてもらうことにした。

基調報告では、現天皇は「戦争体験にこだわり戦争体験の継承を重視し、日本国憲法の平和主義を支持してきたのも事実です」しかし、その「おことば」や海外の戦地への「慰霊」訪問などは、21世紀に入ってからで、時の「政府の見解の枠内」にある。現天皇の「平成流」平和メッセージは、時に強い独自性や個性を発揮し明確なメッセージを発信することはありますが、歴史と政治によって大きく規定されたものです」と指摘された。そのとおりだろうと思う。また、こういう天皇イメージやそれを肯定的に受け取る国民感情と安倍政権との「関係はちくはく」だという指摘も首肯できないではない。

しかし、天皇の代替わりと新元号の

井口 和起
(福知山公立大学
学長・本会代表)

制定をめぐる問題についての指摘や意見交換が無かつたのは残念だった。

一世二元制は言うまでもなく明治に創りあげられ、その元号で年表記することの強制は旧皇室典範に根拠づけられていたのだが、戦後改革によってこれらはなくなった筈だった。ところが、これまで周知のとおり、昭和天皇の高齢化と代替わりを見越して、1979年に我々の反対を無視して元号法制化が行われた。この「元号法」は元号の制定について定めてはいるが、元号で年表記せよという規定はない。私は、慣例で用いられているに過ぎないのではないかと思っていたが、そうではないようだ。1994年3月31日付の国の規則「公文書の年表記に関する規則」(規則第3号)で、「公文書の年の表記については、原則として元号を用いるものとする。ただし、西暦による表記を適当と認める場合は、西暦を併記するものとする。」とあり、同年の4月1日から施行された。いまま、これで我々は元号表記を強制されているようである。

元号は言うまでもなく中国文化から

『燎原』の合本「電子ブック版」発売中!

CD-ROM版 各巻頒価3000円(送料共)

- 第1巻 (創刊号から第50号)
- 第2巻 (第51号～第100号)
- 第3巻 (第101号～第150号)
- 第4巻 (第151号～第200号)

*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823 (井手方)



入って来たもので、君主がその領域に空間だけでなく、時間をも支配するという思想に基づいている。だから「正朔を奉ず」(天子の定めた元号と暦法を用いる)ことがその王権への服従の要件となっていた。

そういう思想に基づく元号の制定とその使用が今なお国民に強要されている。その結果、明治時代・大正時代・昭和時代という「時代区分」が「定着」し、そしてマスコミ界挙げて「平成30年」ものを企画・報道し、「平成時代」が終り、まもなく発表される新しい元号で、あたかも新時代が幕開けするような世論づくりが行われている。

因みに、このような元号で年を刻んでいる国はいまや世界のどこにもない。まさしく「万邦無比」である。だから日本固有の伝統・文化だから尊重し、使い続けよとでもいうのだろうか。昨年春から夏にかけて、政府は各省庁が保有する行政システムの日付データに元号ではなく西暦に一本化することも検討したのだが、これは結局見送りになったようである。

いずれにせよ、公文書における元号の使用強制とそこから生じる元号による「時代」区分などでは、世界に通じる「時代感覚」=歴史感覚や歴史意識は生まれようもない。これを看過してはなるまいという思いがますますつのる昨今である。

半世紀の歴史を刻んだ 原爆忌全国俳句大会

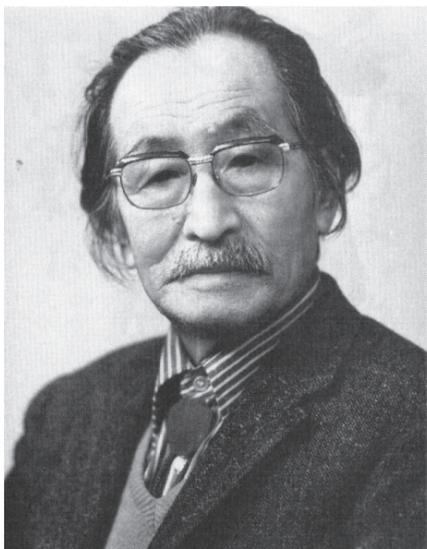
伊藤 哲英
(原爆忌全国俳句大会
実行委員会事務局)

大会の源流に蜷川虎三氏

今年、原爆忌全国俳句大会は9月14日(土)に立命館大学国際平和ミュージアムを会場に開催します。迎えて第53回です。第1回大会は被爆20年に当たる1965年でした(後に説明しますが、2年の空白があります)。

被爆地でない京都で「全国」を冠してこの大会が始められたのは、奥田雀草氏の反核平和にかける思いと蜷川虎三京都府知事の後押しがありました。蜷川氏の俳句は、清水寺に

道はただ一つ その道をゆく 春の句碑があります。ほかにも 峠のむこうに春があると 歩きつづける



奥田雀草氏

丹後小春 みんな見た顔 知った顔 などの句を残しています。彼の俳句の師は、口語自由律の俳句結社「高原」の主宰者であった雀草氏だったので。実は、原爆忌全国俳句大会には前史があります。米ソの核対立に加えて1952年にはイギリ



第一回大会記念の手拭い

スも核保有国となりました。1954年には第五福竜丸のビキニ水爆被災事件が起きました。これをきっかけに反核・平和運動が高まり、翌1955年には第1回原水爆禁止世界大会広島大会が開催されました。しかし、米ソの核軍拡競争は止むことなく、雀草氏は1958年に原爆忌俳句大会を始めました。

その後も1960年にはフランスが、1964年には中国が核実験を成功させ、5か国が核保有国となりました。1965年に全国大会としたのは「広島・長崎被爆20周年を修して」とされていますが、核兵器が世界に拡散していく状況を受けてのことであったでしょう。全国大会として開催することに賛意を表明したのが蜷川氏で、その一句は雀草氏の俳句と共に手拭いに染められ、記念品として参加者に配られてきました。第1回大会には

あの人も この人も と 雲を見る 原爆忌

の句が染められています。(写真上)

大会を始めた 奥田雀草氏の思い

第1回の後援は、京都府、京都市と文化団体懇話会となっています。第2

ありがとうございます。

この原爆忌俳句大会は、八月のヒロシマ、ナガサキの式典や、各地の戦争反対・核兵器反対の運動とは、趣を異にしています。

ひとつの集団としてある目標を掲げて、その運動を外に大きく拡げていこうというのではありません。もちろんそのことは大切なことで、この大会を手本に全国各地で、原爆忌俳句大会が開かれるようになったのは、あくまで結果としてそうなったのであって、ここで私たちがめざしているのは、自らの内なるものへの語りかけです。

たとえ、年に一回でも、自らの心に、生命の尊さ、戦争のおそろしさを問いかけること、そしてその気持ちを俳句という短いことばのなかに、凝縮することによって、より確かなものにしていくことが大切なのです。

こうした意味で、この大会が再開されたことをみなさんとともに、心から喜びたいのです。ですから地味でいいのです。しっかりと根をおろして、したたかに、つづけることが最も大切なことです。

雀草氏亡き後の大会

第18回大会も雀草氏は大会委員長と



第一回大会(京都平安寮)

回には京都俳句作家協会が加わりまし。第4回には兵庫県、広島市、夕刊京都新聞社が加わっています。第16回大会までに加わったのは、大阪府、滋賀県、長崎市と、京都府下の舞鶴市、綾部市、宇治市、城陽市、亀岡市、向日市、伊根町の自治体と京都新聞社、京都民報社です。

第1回大会の作品募集要項には、『記念句集』発行について」の一文があつて、参加者の作品で句集を編み、国会図書館その他関係方面へ寄贈し、世紀の証言の1冊としたいと書かれており、『句集・原爆忌』が発刊されています。1人2句で、383人のアンソロジーです。この句集は第6号まで私の手元にあります。

第16回(1980年)大会を済ませたあと、雀草氏の病気のため2年間の空白があります。再開された第17回大会(1983年)は、雀草氏欠席のまま夫人の雅子氏により開会のメッセージが読み上げられて始まっています。このメッセージに雀草氏が全国に呼びかけをした思いが語られていますので、全文を引用します。

*

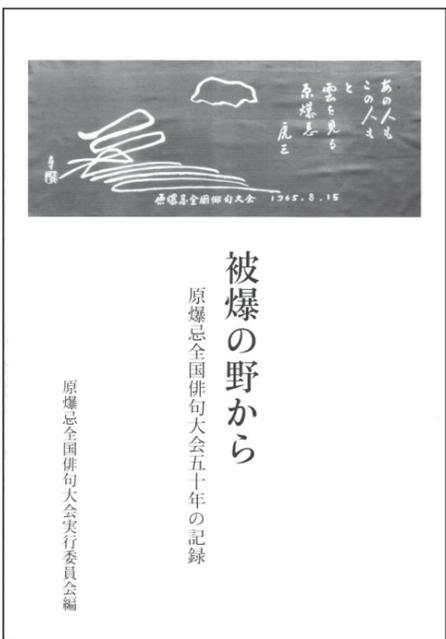
三年ぶりにこの大会を開くことができました。残念ながら、私はこの席にでることができません。けれども、涙のでるほどうれしいことです。ひとえに、みなさんのおかげです。

してメッセージ参加でした。第19回大会から第22回大会までは雅子夫人が実行委員長代理として開会のあいさつをされています。第23回大会を前に雀草氏が亡くなり雅子夫人が実行委員長を引き継ぎました。第29回大会から雅子氏の要請を受けて立命館大学国際平和ミュージアム館長の安齋育郎氏が実行委員長を引き継ぎました。この間事務局を支えてこられたのは、高原同人であった安田汀氏でした。第30回大会までの「報告集」は、実行委員会からの委託を受けたかたちで『高原』誌が報告特集号を編纂していました。安田氏が亡くなり、第31回大会からは事務局を立命館大学国際平和ミュージアムに移し、「献句集」「報告集」ともこの事務局で編纂発行するようになりました。

第43回大会を前に安齋実行委員長が立命館大学退職となることで、平和ミュージアム内に事務局を置くことができなくなることになり、それまで投句をしたことはあるものの全く関わってこなかったのですが、私も定年退職したところで、「ここまで続いてきた大会を終わらせることはできない」という思い一つで引き受けました。

50年の歴史を 『被爆の野から 原爆忌全国 俳句大会五十年の記録』に

2年のブランクがあつて再開した第17回大会（1983年）から記念講演を行っています。



第24回大会（1990年）には当時立命館大学国際関係学部教授であった安齋育郎氏が講師として招かれ、「核の力と詩の力」の演題で講演をしました。ここでできた関わりが、後に安齋氏へ実行委員長を依頼することにつながりました。

願いされていたことが多かったのですが、代わってからは、安齋氏が平和運動で関わってこられた被爆者、学者、運動家が登場します。

実行委員会では第50回までを『被爆の野から 原爆忌全国俳句大会五十年の記録』に収録しました。毎回の入賞句はもとより、記念講演は、可能な限りオリジナルの雰囲気を保った形で採録しています。講演者の一部を紹介します。（肩書は講演当時）

細野武男（元学校法人立命館総長）
寿岳章子（京都府立大学教授）
田畑 忍（元同志社大学学長・憲法学者）
大村しげ（随筆家）
永原 誠（京都原水爆被爆者懇談会代表世話人、立命館大学教授）
置塩信雄（神戸大学名誉教授）
得丸英勝（京都大学名誉教授）
岩井忠熊（立命館大学名誉教授）
大石又七（元第五福竜丸乗組員）
松谷英子（長崎原爆松谷訴訟原告）
沢田昭二（名古屋大学名誉教授）
谷口稜暉（長崎被爆体験者）
坪井 直（日本原水爆被害者団体協議会代表委員）
間間 元（ビキニ水爆被災事件静岡県調査研究会）
藤岡 惇（立命館大学名誉教授）
平 信行（京都「被爆二世・三世の会」）

紙面の関係で紹介は一部ですが、どのお話も講演者の思想や体験や願いを反映した大変貴重なものです。総ページ710ページの内478ページを記念講演が占めています。

また、「大会宣言」も採録しました。第29回大会からは安齋実行委員長が起草しています。原水爆禁止世界大会の大会宣言起草委員長であった安齋実行委員長は、核兵器廃絶をめぐる1年間の世界の動きを踏まえた大会宣言を提案してきました。核兵器廃絶を願う世界の歴史をたどる読み物として、資料的な価値の高いものとなっております。

『被爆の野から 原爆忌全国俳句大会五十年の記録』は、残部僅少ですが送料共で5000円でお送りします。

左記に送金、または郵便振替をご利用ください。

〒605-0952
京都市東山区今熊野宝蔵町64
伊藤哲英
郵便振替番号
00900-1-327490
口座名 二弦俳句会

訃報に接して



岩井 忠熊

（立命館大学名誉教授、本会名誉代表）

昨年5月に井ヶ田良治氏、今年1月に梅原猛氏、そして2月に直木孝次郎氏が亡くなった。取り残された私にとって、いずれも重い存在だった。

梅原猛氏

故井上ひさし氏らとともに、「九条の会」の呼びかけ人に加わっている。彼の面目躍如というべきだ。

直木孝次郎氏

直木孝次郎氏は日本古代史の著名な研究者、大阪市立大学名誉教授だった。他面で短歌に長じ、宮中の歌会始に召人として参会したり、朝日歌壇賞を受賞した。私が知り合った時は温厚で篤学な先輩とだけ思っていた。しかし次第に過去の戦争を容認しようとする世相に対して明確に批判的な態度を表明されることを辞さなくなられた。100歳の長寿を全うされた。

井ヶ田氏は京大国史科の同期卒業だが少し説明が必要だ。実は私は2学年早かったが「学徒出陣」で時間を食われ、井ヶ田氏は皮肉にも1945年8月15日入隊の予定となっていたため、軍隊経験なかった。彼は秀才で学業も最短コースを歩んだ。大学院在籍中に同志社大学法学部の日本法制史担当として採用され、そこで憲法の田畑忍教授と出会い、同教授を中心とした憲法運動に熱心に参加した。京都の憲法運動の全過程を体験したただ一人が彼であったといえる。研究者としての同氏の業績はこの短文ではつくせないから省

略する。ただ古文書を駆使し、留学先の英国の史料も手がけるなど、手がたい学風であった。享年92歳。

梅原氏も井ヶ田氏と同年であった。私は立命館大学文学部で同僚としてつき合い、相互に自宅を訪問したこともある。彼の担当は倫理学だったが、もっと広い意味での哲学者、思想家という方がふさわしい。大学紛争の余波で立命を辞めて京都市立芸大へいき、学長もつとめ、国際日本文化研究センターの初代所長もつとめた。日文研の設立にさいして中曽根首相に働きかける等の行動があり、私はそれを批判する文章も公表した。しかし彼はある会合でわざわざ私に近づき「世の中が怪しい方向に流れていこうとしている。お互い頑ばろうぜ」と声をかけられたことがあった。いうまでもなく彼は

戦争体験にこだわり戦争反対をつらぬいた三氏

忘れ得ぬ人

昨2018年6月、早川一光先生が亡くなられた。

早川さんは西陣のおじ、おばが好きだった。病院職員とも常に対等だったと思います。私などいつも冗談を言い合っていました。

早川さんは昭和25年(1950年)京都府立医科大学を卒業して西陣地域に入る。「上京生活を守る会」が中心になって早川先生の情熱と意欲に賛同し、白峰神宮北側の民家を借りる。堀川病院の前身である診療所が誕生、第一号の患者さんは高本さん、西陣京極の飲食店の方、長く堀川病院助成会の世話役であった。

「医療にかかれぬ人に医療を」の目的のもと献身的に活動を広げ「自分達の健康は自分達で」と地域住民

わらじ医者と慕われた 早川一光さんを偲ぶ

木村 誠一

(元堀川病院職員)

の組織の輪が大きくなり病院設立につながった。

病院助成会は会則で次のように記す。「市民の健康を守り、平和で民主的な福祉社会をねがう、すべての人々と手をたずさえて、健康で明るい社会をつくることを目的とし、あわせて市民の社会的地位の向上を計るものとする。」

会の事業は、1会員の健康診断と病気の予防、2堀川病院の医療の助

地域に根ざし、常に患者さんに寄り添って

成、3会員の親睦と文化の向上、4助成会だよりの発行その他となっている。

会員になるには年間1000円の会費を納め、出資金、積立金などの協力をしている。

上京区全域と北区、中京区等からも加入があり4000人を超えた。助成会だよりは5000部発行、特に一面は公害問題、原爆、平和と戦争の記事等で啓発してきた。病院の日常医療は住民の願いに応

え、早川先生の1内、呼吸器の2内、循環器の3内、消化器の4内と固定し、産婦人科、歯科まである総合病院であった。京都の医療界でも人望の厚い竹沢院長のもと、早川先生以下がしっかりと補佐してきた。

あの松田道雄先生も顧問として診察も担当していた。

常に患者さんに寄り添い、昼夜通して献身的に応えてきたからと考えます。医療の進歩は目まぐるしく、

「大山崎明るい民主町政をすすめる会」

の推薦候補で闘った町長選挙に積極的に応援演説もしていた。

少子高齢化がいわれているがマスコミに惑わされることなく、病気のことで、家族のこと、自分はどう考えるか、多くの友、仲間をつくり、国の医療施策、これに追随した自治体の施策を変えさせなければと思は思。医療の格差をなくし、医師の偏在を是正し、薬漬けにさせない。入院して手術をしたら元気になる医療を求めましょう。

京都における社会労働関係資料 アーカイブズを展望して

佐々木真成 (京都社会労働問題研究所理事)

全国各地の社会労働関係アーカイブズ、これらが参加した全国組織・労働資料協議会という組織があります。代表は法政大・大原社研の鈴木教授で、事務局はエル・ライブラリー(大阪労働資料館)館長の谷合氏が担っています。資料館と名のつく館は全国各地に存在しますが、「功成したる人物」に関わる資料館などは多岐にわたる分野で存在します。また、民芸・風習などを紹介するもの、

大きな災害や大きなイベントの記念資料館、炭鉱など産業、特産物、企業関係資料館、農民一揆や民衆の戦いの歴史館、宗教関係など実に広範囲に及びます。

全ての都道府県に欲しいのが「労働関係資料館」です。連合や全労連などナショナルセンターにはそれなりの資料室がありますが、資料群の多くはセンターの取組に関わる資料であり、主な単産や共闘関係が中心です。両センターの資料室をはじめ、

各地の社会労働関係資料の保存、活用に取り組んでいる諸団体が参加しているのが労働資料協です。

昨年の10月から12月にかけて、その中の川崎市労働資料室と大阪産業労働資料室を訪ねて、資料室の見学と運営の実態についてお聞きする機会を得ました。

川崎市労働資料室などの事例に学んで

川崎市労働資料室には、現在、社会労働関係の書籍4万冊が所蔵され、日常的に閲覧、貸出しが出来るようになっていきます。社会労働関係の定期発行物や白書や貸金センサスはもとより政府刊行物もほとんど揃っています。もちろん全ての書籍が貸出しの対象になっている訳ではありません。資料群の中には主だった労働組合の大会資料や年史誌、戦前からの社会運動史関係資料、諸団体の定期発行物なども収録されてい

ます。閲覧したい資料はパソコンで検索して対象物の所蔵個所を抽出し、閲覧カードにて申し込むシステムとなっています。

川崎市労働資料室は、1976年に川崎市の事業として開設されました。もちろん、労働界などからの強い要望に基づくものです。当初は所蔵書籍も9000冊程度でしたが、現在では4万冊に及びます。慣習化された「資料の保存」は、労働組合の解散や統合等とはより日常的なイベントや大会、争議の記録がその都度資料室に提供され、「散逸を防

いでいる」といい、その活動の中心は川崎労協が担っています。この資料室は、川崎市が助成しつつ、その運営には労協が関与しながら、委託した事業者によって作業が進められています。資料室には職員3名が交替で実務にあたり、収集された書籍の仕分け、保存、貸出、返還書籍の再配置など日常の業務にあたっています。

亡くなられた著名な学者、政治家、評論家、運動家のご遺族からの贈書や保存依頼もあり、資料室の存在が、

資料の散逸を防ぐ役割を果たしているようです。

また、資料室は単に書籍の保存・貸出など図書機能だけでなく、資料室として「労働学校」も開設しています。15回の講義で費用は3300円、川崎市の補助が相当になるものとみられます。広報活動として、「資料室だより」を定期的に発行し、イベントの案内や資料の紹介などを行っています。

こうした社会労働関係資料の収集や管理、活用の活動、事業は現代の社会を形作り、行く道を探る上で重要なものですが、行政の支援は欠かせないもので、川崎市労働資料館の姿は非常に多くの教訓、教材になるものと実感しました。

京都では、現在、社会労働関係資料について収集、保存、活用を日常の活動として存在しているのは府立総合資料館の他は社団法人京都勤労者学園やNPO法人京都社会労働問題研究所などで、その他幾つかの団体や個人の所蔵として保管されています。これらを一堂に管理、活用出来る資料館が出来れば、資料の散逸を防ぎ、未来への橋渡し役が果たせるのではないかと、切に希望しています。

新村猛の思想形成と「満洲事変」

——ファシズムと戦争に抗う主体の誕生——

(中)

成瀬 公策 (名古屋歴史科学研究会・会員)

1 はじめに

フランス文学者の新村猛は、1930年代半ば、国内においては軍部の発言力の増大するにつれ自由な言論空間が急速に剥奪され、日本帝国主義によって中国大陸への侵略がまさに本格的に開始されようとする状況下、『世界文化』を言論活動の舞台として、侵

略戦争に反対する明確な意思を有し、軍国主義・ファシズム化に徹底的に抵抗した人物として知られる。35年2月『世界文化』は、中井正一、真下信一、久野収、新村猛ら京都帝国大学文学部出身の若手研究者たちを中心メンバーとして創刊されている。「非常時」と声高に叫ばれる当時の

時代状況の中で、彼らは強い不安感とニヒリズムを内面に抱えながらも、真下の筆による創刊の辞では、市民社会において積極的に責務を担う知識人として、「本当のもの、正しいものを求めつゝ、動いている人々」に寄り添い「真理の扉を、たゞくことを忘れないでゐる

代より新村が積極的に受容したルソーに代表されるフランスの教育思想に基づき、教育実践を行うことによって、平和を愛好し、なおかつ自立した個人が各自が自由にそれぞれの価値観に基づいて幸福を追求する主体の形成がめざされたものといえよう。

注目すべきは、敗戦直後の比較的早く占領期より新村が戦後平和運動の旗手として登場し、以後生涯にわたって継続的に運動の中核を担ったことである。大山郁夫や平野義太郎らの呼びかけに応じて49年4月第一回平和擁護日本大会(東京)に参加する一方で、彼が名古屋大学に赴任した直後の9月には愛知平和を守る準備会の設立にも

真摯な手によつてのみ、この雑誌は育てられるであろう」といかなる困難に遭遇したとしても真理探究を継続する意思を鮮明にしている。そして、『世界文化』は、主にソビエトを含む欧米社会に限定されるとはいえ、その名のこ

とく世界に対して徹底的に開かれた姿勢を堅持しつつ、同人たちは、理性と合理主義的精神にもとづく批評活動に邁進した。新村は、自己のフランスの文学や思想に関する研究成果の発表に止まらず、堪能なフランス語の能力を活かして、フランス知識人の詳細な動向や高揚する人民戦線運動・スペイン内戦の経過など最新のヨーロッパ情勢を報じることを通じて、戦争とファシズムに対して抵抗の意思を示したのである。侵略戦争へと猪突猛進する国家権力は、言論活動と文化サークル活動しか関わっていなかった新村の身体にも容赦なく襲いかかり、37年11月中井真下、久野らとともに治安維持法違反の容疑で逮捕され拘束の身となった(同

年第三回国連軍縮総会日本代表団団長に選出されたことに象徴されるように、日本の平和運動家を代表して反戦平和・軍縮・核兵器廃絶などをアピールし各国政府と国際輿論にはたらきかけるという重責も担っていたのである。

このような新村の平和運動への積極的な関わりを支えたのは、例えば「核兵器廃絶」という目標を共有する団体や個人は、それぞれの主体性・自律性を相互に尊重しつつ、共通の目標を実現するために、思想・信条はもとより職業、宗教などの違いをのりこえて常に行動は統一しなければならぬという固い信念である。30年代半ばよりフランス人民戦線運動の経験に深く学び、

時期に『世界文化』も廃刊)。39年8月に執行猶予判決が出て、釈放されたものの、官憲の厳しい監視は敗戦まで続き、筆を折ることを余儀なくされたのである。戦時体制への協力はできずかぎり回避しており、抵抗の精神は、決して失われていなかったように思われる。

1945年8月15日日本帝国主義の敗北は、新村自身にとつては、解放であるとともに、身体拘束の危険性、生命の危機から自由になることを意味していた。新村は、「反ファシズム、反軍国主義を標榜する」京都自由人協会(45年10月)、「人民戦線京都協議会」(46年1月)、「京都民主戦線」の活動に参加するなど(松尾尊完『戦後日本への出発』岩波書店、2002年)、いち早く平和と民主主義を希求する運動に立ち上がった。この時期、日本史研究会・部落問題研究所・民主主義科学者協会京都支部、新日本文学会等の学術研究・文化団体にも積極的に関わっており、彼は、京都市内における学者文化人や戦前からの社会運動家たちの多種多様なネットワークを結びつける位置にいたのではないかと考えられる。また、新村が興味を引くのは、「行動の人として思考し、思考の人として行動する」「近代人」を育成したいとの並々ならぬ情熱を持ち、46年5月京都人文学園を創立していることである。30年

その後も思索を積み重ね到達した結論でもあった。新村は、ことあるごとに行動の統一の重要性を繰り返して力説するだけでなく、自らの信念を躊躇することなく勇氣をもって行動に移したのである。63年8月、部分的核実験停止条約の評価をめぐって、社会党と共産党間の対立がさらに深刻化しつつに原水爆禁止運動が分裂すると、以後運動の統一をめざして政党役員や労働組合の幹部、これに携わる知識人らに統一の回復を訴えるために、全国各地を奔走したのは、もつとも典型的な具体例である。

また、71年1月社会党・共産党・愛労評・学者文化人懇談会の推薦を受け、新村が「明るい革新県政をつくる会」より愛知県知事選の候補者として推薦されたのも、以上の述べてきたこととけつして無縁ではないであろう。他言するならば、新村を候補者として担ぎ出すことによつて、当時対立が深刻化しつつあった革新勢力を糾合することを可能にしただけでなく、これによつて、政治変革を待望する県民・有権者の支持を飛躍的に拡大することに成功したのである。保守地盤が強固な中で現職の桑原幹候補とほぼ互角にたたかい、選挙結果は、県全体の得票率46・9%で名古屋市内では桑原票を上回り、73年に同市で革新市政が誕生する礎となったとされる。

(新村猛略年譜)

1905年8月2日新村出・豊子(旧姓荒川)の次男として東京にて出生。出が京都帝国大学に赴任したこととともない09年9月京都市に家族で移住。

京都市立銅駱尋常小学校卒業後、京都府立第一中学校(19年4月~23年3月)、第三高等学校文科丙類(23年4月~26年3月)を経て、26年4月京都帝国大学文学部史学科に入学し翌年4月仏文学科に転じて30年3月卒業。

31年4月同志社大学予科講師(翌年4月教授に昇任)となりフランス語を教える。同年9月岡野龍子と結婚。34年2月ぐらいいから再刊をめざした『美・批評』同人に加わり、これを改題した『世界文化』(35年2月~37年10月)の編集・執筆では真下信一、久野収、和田洋一らとともに中心的役割を担う。フランス知識人の動向や最新のヨーロッパ情勢などを伝えることを通じて、戦争とファシズムに対して抵抗の姿勢を示す。37年11月治安維持法違反の容疑で逮捕され、39年8月に執行猶予判決が出て、釈放される。40年1月より出が主宰していた『辞苑』の編集に携わりつつ、同年10月京都帝国大学図書館に嘱託として勤務している。晩年に至るまで『広辞苑』の執筆・編集に関わっている。

敗戦直後の46年5月京都人文学園を創立し、学園長に就任し、自由で理想的な教育の実現を試みる。49年8月名古屋大学文学部教授に就任する(69年3月定年退官)。中央で活躍する知識人らが全面講和を提唱した平和問題談話会に参加するとともに、49年秋には愛知県内の平和運動にもかかわりはじめ、平和擁護愛知委員会(後の愛知県平和委員会)では永年にわたり会長を務めるなど、地域においても平和運動の先頭に立ち続けた。63年8月、部分的核実験停止条約の評価をめぐって、原水爆禁止運動が分裂すると、以後運動の統一をめざして尽力している。71年1月には「明るい革新県政をつくる会」を支持母体として愛知県知事選に立候補する。92年10月31日国立東名古屋病院にて呼吸不全により死去。

新村は、敗戦直後より晩年に至るまで、平和と国際連帯・民主主義・労働者・教育・公害患者、障がい者などあらゆる分野の社会運動にコミットメントしており、いのちある限り平和と自由のために全力投球した生涯であったといえる。たたかう民衆の伴奏者としてあゆみつづけた姿は、多くの共感と感動を呼び起こし、その記憶は、市民の間では今も鮮明である。

ここで研究史についてふれておきたい。1975年に『世界文化』（小学館）が復刻されてから、『世界文化』研究は着実に積み重ねられ、21世紀に入ってから以降も、山崎雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中と戦後の文化運動』（風間書房、2002年）、吉田正純氏の中井正一を中心とした『世界文化』同人たちに関する一連の論文（2002年―）、後藤嘉宏『中井正一のメディア論』（学文社、2005年）など、教育運動史、メディア論やコミュニケーション論から注目すべき研究が発表されている。「委員会の論理」がきわめて高い評価を得ている中井正一は、重厚な研究が存在するが、それ以外の『世界文化』同人についての個別研究は、新村猛を含めて少ないといえる。

『新村猛については、『新村猛著作集』全三巻が（以下本稿では『著作集』と略記）三一書房より1993年から95年にかけて刊行され、今江祥智・川村

孝則・長谷川太郎氏らの解説が付され様々なエピソードや多彩な人物像が提示されて興味深い。研究はまだ乏しいように思われる。

ところで、新村猛自身の戦後の回顧によれば、反戦平和の意を強くしたのは、満洲事変（31年9月）が画期的な契機であると強調されているのである。本稿においては、戦後平和運動の旗手として活躍することになる彼が、どのようにして戦争に抗う主体として自己形成したのか、という筆者の問題関心

2 修学期における人格形成と読書体験

(1) 父新村出

新村猛について述べる前に父親の新村出がどのような人物であったのかごく簡単にふれておきたい。通常の父子関係とは比較にならないほど濃密な父子関係を形成し、猛の人生にとつて、父出の存在は、絶大な影響を及ぼしたと考えられるからである。例えば、1949年8月、猛が名古屋大学に赴任し京都市を離れるまで、進学、就職、結婚など人生の重大な選択も、必ずといってよいほど父出の意向を踏まえて、されているのである。

(2) 幼少期（出生から小学校卒業まで）

新村猛は、兄秀一（1902年3月生）、姉幸子（04年2月生）、弟弘（06年12月生）、妹洋子（10年1月生）の五人兄弟であったが、11年4月弘は、小児がんのために5歳の誕生日を迎えることなく夭逝している。

幼少期、猛の身体もかなり病弱であった。このことによつて、彼の人格と価値観の形成に根源的な影響を及ぼしたことは、想像に難くないであろう。

猛自身の晩年の回想（新村猛「私の自叙伝」新村猛追悼集刊行委員会「緑の樹 新村猛追想」同時代社、1995年）によれば、小学校の時代に四度も伝染病に罹り、2、4、6年生の時に京都帝国大学付属病院（主治医は平田幾太郎）に入院し、そのたびに一カ月前後闘病を余儀なくされたという。そこで幼い猛少年が目当たりにしたのは、「同じ病室にいた幼い子たちが相次いで亡くなって運ばれていきました」という実に衝撃的な光景であった。人一倍感受性の鋭い猛少年にとつては、言いようのない恐怖感に襲われ、自身の死をも予感させる出来事であったに違いない。「人間のいのちというものが、いかにはかなく、尊いものかと

をから、出自・家庭環境も含めて出生に遡り、人格・思想形成の過程を明らかにすることを目的とする。併せて、満洲事変（31年9月）を契機として、関東軍の侵略行為を全面的に支持する世論形成がされたのとは逆に、なぜ彼が侵略戦争に反対することが可能となったのか、考察したい。なお、本稿では主たる叙述の対象期間は、新村が、本格的言論活動を開始する『世界文化』（1935年2月創刊）以前に限定することを予めお断りしておきたい。

1876年10月4日、関口隆吉（当時山口県令）の次男関口出として山口県に生れる。千葉県佐原の漢学塾では四書五経などを学び漢学の素養を身につけ、87年静岡県尋常中学に入学し、英語中心の教育を受け、92年3月に卒業（新村恭「広辞苑はなぜ生まれなか―新村出の生きた軌跡」世界思想社、2017年）。この間父関口隆吉は静岡県知事任職中に鉄道事故死（89年5月）により、同年12月出は、幕臣新村猛雄の養子となつている。92年9月、一高の予科に進学して、落合直文の感化を受け国文学を学ぶとともに、幸田露伴、森鷗外、坪内逍遙、島崎藤村らの作品を愛読した文学青年であった（一

いうことを身にしみて子ども心に感じとつたものです」と述懐している（同前書）

あるいは「生き物を憐れむ気持ちが強く、昼間採ってきたトンボを夜には、虫かごを開け逃がす」（『著作集第二巻』初出は新村猛「平和運動家の反省―ロマン・ローラン生誕百周年に際して―」『展望 1966年』という心やさしい少年でもあった。

弟弘の「死」をはじめもつとも身近なところで「死」に直面することで、生命というものに対して畏敬の念を抱くとともにいのちを愛しむところを彼自身の中で育んでいったものと考えられる。以上のような幼少期の経験が、平和運動に献身する自身の原点である。と、猛は繰り返し強調しているのである（前掲新村猛「私の自叙伝」他）。

幼少期に病床生活を強いられたことと大いに関係していると推測されるが、猛は、無類の読書好きな少年でもあった。この点でも家庭環境とりわけ父出の絶大な影響を受けて育ったことは言うまでもない。すなわち「私は小さい頃から父の蔵書に囲まれて育って来ましたが、本に対する親しみは普通の方の場合よりは強かった」と述べている（前掲『広辞苑物語』）。小学校高学年のころには、図書室によく出入りして巖谷小波の童話や戦記物を愛読した他には、立川文庫を耽読したという（著

高は4年間在籍）（同前書）。1894年11月帰朝したばかりの上田萬年の講演「言語学者としての新井白石」に深い感銘を受け、言語学研究への道に進むことを決意する（新村猛『広辞苑物語』芸術生活社、1970年）。96年東京帝国大学に入学し、99年7月卒業（明治天皇より恩賜の銀時計を授かる）。1901年より東京帝国大学大学院に在籍しつつ、東京帝国大学講師を務める。02年東京高等師範学校をへて07年1月京都帝国大学文科大学助教授となり、同年4月より二年間ドイツのベルリン大学、ライプツィヒ大学に官費留学し、イギリス、フランス、オランダも歴訪している。帰朝後09年5月京都帝国大学に着任し、教授として言語学などを講じていた。

以上のように新村出は、幼少期より伝統的な学問である漢学の素養を身につけ、かつ国文学の著作にもふれるとともに、当時としては最新の言語学理論に精通していたということが出来る。このような幅広い教養をバックグラウンドとして、いまだ国語学、国文学、言語学が未分離の混沌とした学問状況から、西欧の言語学理論を体系的に摂取した上で日本に置いて新たな学問分野を創造的に開拓したのが、新村出であったのである。そして、学問の方法は、次男猛によれば、「理論的体系的というよりも、歴史的考証的性格」が強く「国

作集第三巻」初出は「かけがえのない人生―若い日の思い出―」『学習のひろば』1974年9月号）。また、小学校3・4年生のころより綴り方に兄弟姉妹の中でいちばん強い興味関心を抱き、石川啄木に傾倒し後には七五調の新体詩の創作も手掛けている（『著作集第三巻』「フランス文学徒の前半生」初出は大高順雄編『フランス文学と私』平凡社、1985年）。読書に没頭することには止まらず、文芸の創作に並々ならぬ意欲を示しているのは、甚だ興味深い。文学への目覚めは、少年期からのことであつたといえよう。

両親の深い愛情を注がれ、猛たち兄弟姉妹は育てられたが、とりわけ父出は、猛を溺愛していたと思われる。出は、自宅を訪れる学者らをたびたび猛に引き合わせていたという。父親として、次男猛の将来への期待もあつたのかも知れない。幼少のころ猛は、父出のところを訪れた上田萬年をはじめとする著名な学者と会ったことを懐かしい出来事として回顧しつつ、「小さい時から理屈ほくて、父のところへ来られるお客様の前へ呼ばれるたびに、どんな偉い先生かのおかまいなしにやりこめようとす」少年であつたと自身について語っている（前掲『広辞苑物語』）。彼は、頭脳明晰で誰に対しても臆することなく応対する議論好きな少年であつたことがうかがえる。

父の恩師や知人などの著名な学者らと直接対面しふれあうことを通じて、「一般に学者と学問に対する敬愛の気持ち」が培われて来た」という（同前書）。新村猛は、「偉大な学者」である父出を心底より尊敬し絶大な影響を受け、新村家という家庭環境の中で成長することによって、学問と学者に敬愛の念を深く抱き、幼少のころより自ずと学問に対する興味関心を育んでいったのである。

(3) 青年期前期

賜チフスに罹り中学を受験できなかったなり新村猛は、一年遅れて1919年4月に京都一中に入學している。当時の京都一中は、大正デモクラシーの風潮が隆盛を極めるとともに、英国流の自由主義者としてきわめて信望が厚い森外三郎（数学者）という人物が学校長を務めていたことにより、リベラルな校風であったとされる。猛自身は、森校長の「好ましい感化を受けることができた」ことを強調しており（『著作集第三卷』初出は「人物群像」1966年10月号）、中学生時代には、自由主義思想に深く共鳴していたものといえよう。ちなみに森は、その後三高の校長に転任しており、猛は中高一貫して森校長の下で学ぶことになる。他方で、猛は、中学二年の時にクラス

新村猛追想)。ちなみに一度も徴兵されることなく、敗戦を迎えており、したがって彼には軍隊経験はない。

(4) 青年期後期 (京都帝国大学文学部 26年4月〜30年3月)

大学に進学するに際して、新村猛の最大の悩みは、専攻分野をどうするのかという問題であった。この苦悩も、父出の存在が無縁でなかったこと

の級友たちとともに『尼港記念展示会』を開催している。ロシア革命（十月革命）後、周知のように日本は他の列強諸国とともに1918年8月シベリア出兵し干渉戦争を強行していた。20年3月12日ニコラエフスクの日本軍は、停戦協定を破って、バルチザンを攻撃したものの、これにあえなく敗れた。同年5月24日より収容中の日本軍民122人が殺害されるといふ事件があった。日本のマスコミによって、日本人が殺害されたことのみが徒に強調され、事件が全国で大々的に報じられ、国民の排外熱を盛んに煽ったのである。政治・社会の問題にも関心を持ち始めていた猛たちもこのような動きにダイレクトに影響されていたのであろう。戦後新村は、満洲事変以後には、「中学時代と高校時代にニコライエフスク事件や大震災の時の朝鮮人虐殺に当たって示した態度をふりかえり、恥ずかしく感じないではいられなくなった」（新村猛「民主戦線の思想遺産」『思想の科学』1962年9月）と心境の変化があったことを吐露している。ここで、どのような態度であったのか、具体的に述べているわけではないが、要するに彼の政治意識も、一般的な日本人と同様に自国の対外的膨張主義政策を疑うことなく肯定してしまう帝国主義的な意識を共有していたということであろう。桑原武夫、貝塚茂樹らとともに回覧

は想像に難くないであろう。東京帝大に進学して父出と同じ言語学を専攻する事も考えたが、経済的理由で断念し（前掲『広辞苑物語』、入学したのは、1926年4月京都帝大史学科東洋史専攻に入學している。大正半ば、大谷光瑞率いる探検隊が中央アジアを訪れていたが、この探検記が、京都をはじめ関西地域では、大々的に新聞報道され世間の脚光を浴びていた。猛も中央アジアへの憧憬を抱くようになっていたという（前掲新村猛「私の自叙伝」『緑の樹 新村猛追想』）。

史学科に在籍中は、羽田亨、内藤湖南、矢野仁一らの講義を受けたものの、ゲーテやアミエールの影響もあり、「過去の歴史を研究して何になるか」という懐疑に陥っているのである（『著作集第三卷』初出は「科学者の歩んだ道―新村猛氏に聞く―（その1）」『日本の科学者』1977年1月）。当時の猛にとって、史料の読解に沈潜することを学究生活との基本とし、実証主義的に過去の事実を再構成する歴史研究は、現実の社会とは接点を持たない無味乾燥な

同人雑誌『近衛』を発行しており、彼の文芸創作の意欲は衰えていなかったことが推測される。依然として読書欲も旺盛であり、中学二年時より、志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎など白樺派の小説に熱中するとともに、猛は、兄や姉といっしょに鈴木三重吉が創刊した児童文学雑誌『赤い鳥』も愛読していた。（『著作集第三卷』初出は『学習のひろば』1974年9月号）。また、三高受験時には、受験参考書はあまり使わず、その代わりに「原典主義」と言って国語辞典や漢和辞典を丹念に引きつつ、「江戸時代の国学者たちの書いた擬古文だとか、平安・鎌倉の物語など」を「読みあさった」という（前掲『広辞苑物語』）。受験勉強においても、父出の日常的な研究姿勢と無縁ではなかったと思われる。

1923年4月に三高文科丙類に入學している（26年3月卒業）。自宅から通学したので、寮生活は経験していない。フランス語を第一外国語とする文科丙類を選択したのは、兄秀一が三高文科乙類に進学しドイツ語を学習していたので、自分はフランス語をやるうと思った、雑誌『白樺』に載っていたフランス印象派の絵画に惹かれた、軍国主義ドイツというイメージを持っていたのに対して、自由を謳歌した時代にフランスに魅かれた等の理由を挙げて

学問と思われたのではないか。「歴史学科の窒息しそうな雰囲気にしたまもなくなくなって」（同前）、父出のすすめもあり、仏文学科への転学を決意するに至り、27年4月に転学したのである。仏文学科では、太宰施門（同教授）、落合太郎（法学部専任講師）フランス人講師の講義と講読を受けて、在籍した三年間を通じて、十七世紀のフランス古典文学を中心にして学んでいる。具体的には、フランス文学概論、コルネーユ・モリエール・ラシーヌの韻文作品（戯曲）の講読（太宰、十六世紀

晩期より十八世紀前期に至るモンテーニュ・パスカル・ラロッシュフーコ・ラブリュイエル・ヴォーグナルグなどモラリストと呼称される著作家たちを対象とした講義（落合）である（『著作集第三卷』初出は前掲『フランス文学と私』）。このような機会を得て「自発的な興味と次第に深くなった理解と高くなった評価に促されて古典文学を熱心に勉強するように」なり（同前）、29年末から30年1月にかけてラ・フォンテーヌ（17世紀の寓話詩人）を研究対象に卒業論文の執筆に取り組み、30年3月に卒業している。卒業式には、文学部総代という榮譽を受けており、かなり優秀な成績を収めていたことがわかる。大学卒業後のおよそ六十年後、猛自身によって、仏文学科の三年間を通じて、同時代のヨーロッパ諸国の中

いる（『著作集第三卷』初出は「科学者の歩んだ道―新村猛氏に聞く―（その1）」『日本の科学者』1977年1月）。週34時間の大半はフランス語の授業であり、折竹錫、河野与一、伊吹武彦らの講義を受けている。この時期には、ロシア文学や北欧文学、アイルランド演劇などに心惹かれ（前掲『広辞苑物語』）、西洋近代文学の作品を多読、乱読しており、その中でもとりわけドストイエーフスキー『悪霊』『カラマーゾフの兄弟』『チエーホフ』『六号室』『プーシキン』『エプゲーニー・オネーギン』ゲーテ『ファウスト』『詩と真実』などの文学作品によって、若き魂はきわめて強く揺り動かされていたという（『著作集第三卷』初出は『学習のひろば』1974年9月号）。

また、猛は、ニーチェやベルグソンに感服し（前掲『広辞苑物語』）、現実の社会や政治にたいしても青年らしい正義感に促されて強い関心を抱いていたけれども、それはまだ漠然としたものにすぎなかった」と自身を省みているのである（『著作集第二卷』初出は新村猛「一平和運動家の反省―ロマン・ローラン生誕百周年に際して―」『展望』1966年11月号）。

なお、他の同年代の青年男子と同様に満二十歳の時に徴兵検査を受けているが、結果は「第二乙」合格であった（前掲新村猛「私の自叙伝」『緑の樹

では、最も優れた不朽の価値を有する十七世紀フランスの言語と古典文学を一所懸命に勉強する機会を得たのは、稀有の幸福であった（同前）と懐かしく回顧している。卒業後は、イタリア語の学習を始めるとともに「フランス・ルネッサンス」という研究テーマで京都帝大大学院に進学している（34年3月修了）。

以上述べてきたように、猛の出生から青年期に至る時期においては、進路選択などの問題はもとより、日常生活上でも、父出の存在が絶大な影響を及ぼしていたことが理解できる。また、彼は文学をこよなく愛するとともに、激動する時代状況の中で、自己の内面においては苦悩と煩悶を抱え、いかに生きるべきなのか真摯に模索する青年ではあったが、大正末から昭和初期にかけて多数現れ、マルクスやレーニン思想を積極的に摂取し、社会変革の実践的な運動に身を投じる政治青年ではなかったといえる。管見の限りではあるが、猛が三高、京都帝大在籍中に社会科学研究会に関わった形跡は一切ないし、プロレタリア文学についてもふれる機会がなかったことを述べている（前掲『著作集第二卷』初出は新村猛「一平和運動家の反省―ロマン・ローラン生誕百周年に際して―」『展望』1966年）。

（以下次号）



冊子『もう一つの明治
維新150年』を発行

井上吉郎（北区）

冊子『もう一つの明治維新150年』が出来てきました。2018年が明治維新から150年にあたるとして、安倍政権は、「美しい日本」として、この150年を美化するキャンペーンを打ち、改憲路線を走りました。この冊子は、2018年の1年間、月刊紙『紫式部』に連載した小文が元になってい

ます。書くとき、その事柄に僕が何らかの関係をもっていることに限りませんでした。

①江華島事件（カンファンドサコン）を引き起こす②秩父事件と自由民権運動③先駆性誇る「五日市憲法」④琵琶湖疏水とアスペン銀山の水力発電⑤京都美術館建設と市民⑥紀元2600年とラジオ塔⑦治安維持法と尹東柱⑧灯らなかつた大文字⑨浮島丸の悲劇⑩マレー人留学生の被爆死⑪京都府立植物園と米軍⑫地方自治の「灯台」とよばれた蜷川京都府政がその内容で、体制が打ち出した「明治維新150年」とは違う、「もう一

つの明治維新150年」になっています。

普及にお力をお貸しください。冊子は1冊100円（消費税込みで108円）、5冊以上で注文してください（送料・振込料もは当方負担）。送付先と冊数をお教えください。

◆催し案内

◆改訂学習指導要領連続学習会
2019年パート1「新学習指導要領と英語教育、どうなる・どうする」
4月27日（土）13時30分～京都教育文化センター101号室。講師：江利

京都の民主運動史を語る会4月例会

と き 2019年4月20日（土）午後2時～

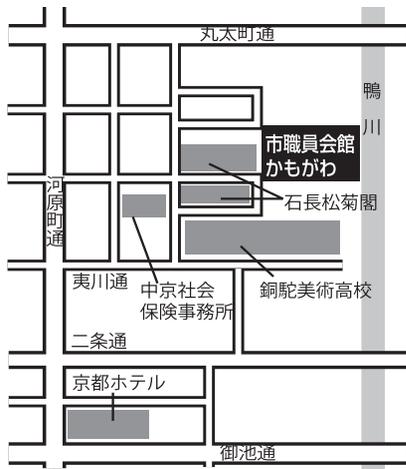
ところ 京都市職員会館かもがわ会議室

テーマ 戦後、京都における部落
問題の変化と調査・研究

語る人 奥山峰夫 さん

（部落問題研究所理事・元大阪経済法科大学教授）

これまで、例会として取り上げることが少なかったテーマですが、京都の民主的な運動の歴史を語る時、欠かすことができないテーマである部落問題。今回は長く部落問題の調査・研究、更には同和行政や運動の研究に携わってこられた奥山峰夫さんに、部落、部落問題の歴史的な変化、変容を語って頂きます。



例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。

2019年度総会のお知らせ

6月22日（土）午後2時～京都市職員会館かもがわ。

記念講演「京都の景観をめぐる運動史（仮）」中島晃弁護士。なお、総会后に懇親会を予定しています。『燎原』5月15日号に返信用葉書を同封の予定です。

川春雄氏（和歌山大学教授）。主催：京教組・教育センター・教科書問題連絡会・京退教・新婦人。

◆天皇代替わり問題「昭和の日」を考える京都集会～日本の侵略戦争・戦争責任を考える～ 4月29日（月）13時30分～京都教育文化センター1302号室。講演：天皇代替わりと『昭和の日』を考える、講師：岩井忠熊氏（立命館大学名誉教授）主催：第52回「建国記念の日」不承認2・11京都府民のつどい実行委員会・第40回「紀元節（建国記念の日）」を考える2・11京都集会。

編集後記



▼燎原240号の「30年間の関電争議団一翼を担って 服部真吾さんに聴く」に反響がありました。冒頭の「小見出し」にした赤旗に掲載された「短歌」の作者の方からです。しかも、「事実は小説より奇なり」で、争議団に二人も教え子がいるとのこと。次号では、「ドキュメンタリー短歌」(?)として、新庄佑三さんの「連作・関西電力人権裁判の上田茂さんに贈る」を一挙掲載したいと思えます。なお、赤旗に掲載された新庄さんの短歌は、「やさしいから強かったのだ！／頼崩し孫あやしているじいちゃん／「闘士」となっていた。選者の添削が入っていた。しかし、新庄さんのオリジナルは三行詩で違うものだった。次号を乞うご期待。